



←矢切のシンボルになっている枝垂れ桜。毎年、見事に花を咲かせる。しかも一週間以上、花が散らないのがいい。

→気温の高い日が続き、江戸川の川面もとろけるようだ。

このところ暖かい日が続いている。一週間前の雪が嘘のようだ。

そんな二十九日水曜日、朝から舟頭さんは落ち着かない。

「今日は庚申（こうしん）の日、帝釈天の縁日なんだ」

庚申の日とは干支（えと）でいう庚（かのえ）申（さる）の日という意味だ。干支と十二支（じゅうにし）の組み合わせで庚申は六十日ごとにまわってくる。帝釈天の本尊が発見されたのが庚申の日だったので六十日ごとに縁日が開かれるのだ。

「オレが子どものころには庚申の日には、たくさんの人が出たもんだ。屋台の店もたくさん出てねえ。飴屋、瀬戸物屋だとかさ。瀬戸物屋の口上がおもしろくって、店の前にしゃがんで聞いたもんだよ」

飴屋は水飴をかためて小鳥や魚の形にして売ってくれる。瀬戸物屋がタンカバイといって、フーテンの寅さんのように、おもしろおかしく口上をしゃべりながら茶碗や皿などの瀬戸物を売る商売のことだ。

今週のクマ

→江戸川の土手の花の中に遊ぶクマ。これが春の楽しみのひとつだ。



→今年もアケビの花が咲いた。毎年、実のなるのを楽しみにしているがいまだに実はできない。今年こそは実をつけて欲しい。



「うちのほうは田舎だったから縁日に露店なんかは来なかったけど、春と秋の牛市には何軒か露天が出たよ」

いまでこそ千屋牛（ちやぎゅう）というブランド名で肉が売られているが、むかしは千屋という名の村で飼育されていた牛で、おもに農耕牛だった。

その農耕牛の子牛が兵庫県の但馬（たじま）地区や三重県の松阪地区などに売られ、神戸牛や松阪牛のブランド名で高級な牛肉になって売られていた。

その牛市では何人かの露天商がやって来た。そのなかに瀬戸物屋もいた。リング箱をたたきながら、おもしろおかしく口上をしゃべりながら皿や茶碗を売るようすがおもしろくて、舟頭さんと同じようにしやがみこんで聞いたものだ。

茨城県の山間の村出身のヤツさんも縁日の思い出があるという。ヤツさんの村では七年ごとに行われる西金砂神社の祭り、七十二年ごとに行われる東金砂神社の祭礼がある。七年ごとの祭りには参道百メートルあまりにもわたって露天が並びという。スケールが違う。

たがい半世紀も前の露天の思い出をなつかしく語る年になった。